

開催地名	愛知県・岡崎市
開催日時	令和5年7月29（土） 09：30 ～ 11：00
開催場所	岡崎市福祉会館6階
語り部	大峪 やす子 （三重県紀宝町）
参加者	市防災課、地域住民 75名
開催経緯	岡崎市では、小学校区を単位とする自主防災組織に「防災担当委員」を設置し、地域の防災リーダーとしての活躍を期待している。しかし、被災時や被災後の役割について事例を踏まえ具体的に伝えることに苦慮している。
内容	（１）紀伊半島大水害からの記録と紀宝町津本地区自主防災会の発足 紀宝町津本地区は、和歌山県、奈良県および三重県を流れる新宮川水系の本流で一級河川を流れる熊野川や、熊野古道と言われる世界遺産や独特の川船、三反帆で有名な地域にある。この地では、2011年（平成23年）8月30日紀伊半島大水害が発生した。奈良県、和歌山県、三重県の3県を中心とする驚異的な豪雨により、熊野川にかかる大橋も浸水状態となった。奈良県上北山での総降水量は、1814.5mmにもなり、熊野川の水位は18.7mを観測した。これは1959年の伊勢湾台風時の16.4mを大幅に上回る過去最高記録である。紀宝町の雨量は、1000mmを超え、熊野川上流にある5つのダムが放水をした為、相野谷川が氾濫した。2011年（平成23年）9月3日17：20頃、9.4mある輪中堤を超えて、住宅街の道路が浸水し始めた。午後8時頃、消防署や警察に救助の電話をかけても、つながらない。隣近所助け合って、高台の家に避難した人や、屋根に上って一晩を過ごした人もいた。電線に流木が引っ掛かり、道路の水が、なかなか引かず、2昼夜、この状態が続いた。 2011年（平成23年）9月9日 野田内閣総理大臣（当時）、鈴木三重県知事が、津本地区の被災地視察に訪れた。そして紀宝町災害ボランティアセンターが開設され、大勢のボランティアの方が来てくれた。その後、全国各地の個人や団体等から、食料や日用品などの救援物資が届けられた。しかし、自宅で困難な避難生活を送った人達には、これらの救援物資が届かなかった。 津本地区の最終的な被害は、津本地区住民118世帯中、床上浸水：81世帯、床下浸水：3世帯 死亡者：1名であった。 2011年（平成23年）11月 私達は、アンケートを配り、津本住民の意見をまとめた。これにより2012年（平成24年）津本地区自主防災会が発足した。 （２） 防災訓練・タイムラインの制定 2012年（平成24年）11月23日に初めての防災訓練を行った。地震体験車、消防団による放水訓練、炊き出し訓練では豚汁を作った。参加者は102名。2012年（平成24年）2月に東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター客員教授 松尾一郎様の指導により、紀宝町は、風水害を対象とした国内初のタイムラインを策定した。タイムラインとは、災害時に、『いつ、何を、誰が、するのか役割や対応行動を定めたもの』である。 2015年（平成27年）7月台風11号が発生した。相野谷川が増水したタイミングで、タイムラインが発令され、津本住民33世帯、61名が早めの避難をした。 2015年（平成27年）8月に台風11号の振り返りを行い、タイムラインワークショップを開いた。『タイムラインの制定により地区住民は早めに非難が出来た』『要支援者には、自主防会長が一人々車で迎えに行った』などの話が上がった一方で、『避難所で、乳

	幼児を抱えたお母さんは、お乳を飲ます時、バスタオルを背中にかけて、飲ませていてプライバシーが守られていないと感じた。』『避難所に入りきれず、車中で過ごしていた。』『テレビが無いので、情報が入りにくかった。』『山水を引いているので台風時、水が出ない』などの反省点も挙げられた。 2015 年（平成 27 年）9 月 6 日、10 月 17 日に行われる、小、中学生合同訓練に備えて、紀宝町津本地区自主防災会でも『避難所運営模擬訓練』を行った。津市南が丘自主防中村 保親様のご指導のもと 45 名が参加した。 この訓練を下に、2015 年（平成 27 年）10 月 17 日、子供支援ネットワークで、小・中学生、地区住民 198 名が、一体となって「避難所運営訓練」に取り組んだ。小学生も社会の一員として、炊き出し班に加わりハイゼックスで、ご飯を炊き、おにぎりを作った。中学生は、高齢者の世話や、三角巾、応急手当、搬送救急法実施を習得した。 2019 年（平成 31 年）1 月 20 日『第 1 回防災チャレンジ大運動会』を実施し、子供から高齢者まで、67 名が参加し、楽しく防災活動に取り組んだ。 （3）コロナ感染症の中での災害対策 2020 年（令和 2 年）7 月 5 日 松尾 一郎紀宝町防災行政総合アドバイザーの指導による新型コロナ感染流行下の避難所開設・運営訓練を行った。職員が、マスク、ゴム手袋、フェイスガード、防護服を着用し、発熱専用スペース、発熱者専用トイレを設置した。保健師が、受付で、問診表を記入し、避難スペースの場所を指定し、状況を適宜対策本部へ報告するなど、コロナ禍での特別な対応の訓練を行った。 （4）まとめ 紀伊半島大水害から 12 年経ち、あの年に生まれた子供は、中学生となっている。今では、水害を経験した人ですら、記憶から薄れて行く。私達に今できることは、「いざ」というとき、経験から得た知識を呼び戻すことだ。家族の糸、地域の糸、それらを幾重にもつむぐことで、地域を守る太い絆が生まれる。防災は糸をつむぐ作業。「大切な命を守る」為継続して活動を行う事が重要だ。
開催地より	道路の浸水が始まり、近所に避難を呼びかけたが気づいていない人も多かったという話や、救助されたが裸足だったので、足が痛くて歩行が大変だったという話、全国各地から、食料や日用品などの救援物資が届けられたが自宅で避難生活を送った人達には物資が届かなかったという話など、災害時のリアルな状況を知ることができた。また、防災訓練の内容について様々な工夫を行っており、非常に参考になった。